

ザ・ドロップアウト

〈偏差値70からの転落〉

「なにが君のしあわせ　なにをしてよろこぶ　わからないままおわる　そんなのはいやだ！」

ある朝、テレビから流れる歌に驚愕した。アニメ「アンパンマン」の歌詞である。

大学卒業後、不本意ながらもサラリーマンの道を選んだ私は、代わり映えの無い毎日に弱音を吐いていた。他力本願な気持ちから、週刊誌で目にする幸せのペンダントを買おうと思ったことさえある。そんな時に耳に入ってきたのがこの歌である。胸打たれた私は早速、百円ショップで買った白封筒に「退職願」と書き記し、わずか十ヶ月の職場におさらばする。そして、その後思いもよらぬ数奇な人生を送っていくことになるのだ。

慶応大学卒業↓大手映像関連企業↓テレビAD↓ミュージックビデオAD↓運送屋仕分け↓人間モルモット↓バーテンダー↓アダルトビデオ制作メーカー↓コールセンター派遣社員↓スト↓ロンドンにてホテルスタッフ、日本料理屋従業員↓アダルトサイトサーバー管理……

これが、この数年の間に送ってきた私の人生である。映画監督という夢を追い求め、いつの間にか流され、そしてまた懲りずに追い求めていく生き様は何も好んで選んだ道ではない。しかし辛酸を舐めた日々は、決して無駄ではなかったと自負することができる。

そんな風に思うのは、私がかつてガリベン少年だったからだ。一日十時間以上も勉強し、東大に入ることばかり考えていた。やがて社会人になっても、その頃に培ったプライドに縛られ、鬱病を伴いもがき苦しんでいた。そんな苦しみが様々な職を経験する中、いつの間にか解き放たれ、今では生きるのが随分楽になったような気がする。

サラリーマンというレールを踏み外すと、どんな世界が待っているのだろうか。週刊誌には「転職失敗」、「下流生活」といった言葉が散乱する一方、求人広告には「キャリアアップ」や「年収数倍アップ」などの文字がギッシリと連なっている。いまひとつ実態がつかめない。

この物語は、レールを踏み外した一人の男の実体験を赤裸々に語ったものだ。楽しい人生を求めて何が悪いのか。言い訳しながら現実を受け入れ、後々後悔するような生き方をするのだ

けは真つ平だ。そんな唯一のポリシーに基づいて生きている男のバカ話である。

ドロップアウト的な生き方が決して良いとは思わないが、何かを始めたくても踏ん切りがつかない人の背中押しになってくれればいいと思う。そして、世の中下には下がいるのだと勇気を持っていただきたいのだ。

目次

第一章	入社十ヶ月で退職！ 隣の席のオヤジにはなりたくない！	9
第二章	夢の先に待ち受けていたボロ雑巾生活！	35
第三章	目指せ！東大！ハーバード！ 伝説のガリベン少年	73
第四章	夢断念!! 流れ流され下流なフリーター・ライフ	85
第五章	ガリベン崩壊！ AV監督に憧れ奈落の底へ	117
第六章	鬱病勃発！ 搾取搾取のハケン地獄	161
第七章	まさか、ホストにスカウト!? ドンペリと夢の香り	181
第八章	終わらないパーティとゲストハウスライフ	211
第九章	ロンドンへの逃避行！ そこで待ち受けていた無一文生活	241
第十章	そして再び、満員電車の日々。挑戦は続いていく	281
エピローグ	天国の口、アムステルダム	297

第一章 入社十ヶ月で退職！ 隣の席のオヤジにはなりたくない！

二〇〇二年新卒の夏

たとえば、南国行きのブルートレインに乗ってみたいと思うことがある。ヘドロのような満員電車を待つプラットフォームの朝。ゴミ箱から雑誌を拾う小汚い男。線路沿いに見える代わり映えの無い消費者金融の看板。後ろから駆け寄るハイヒールの音。オヤジのイビキ。車掌がけたたましく鳴らすホイッスル。そんな時に、目と鼻の先を優雅に駆け抜ける真っ青なトレイン。上空に広がる青空と共にゆったりと、どこまでもそれは駆け抜け、やがて視界の隅から消えていく。

「あの列車に飛び乗ることができれば、どんなに楽になることか」

二〇〇二年新卒の夏。大学卒業後、東京にある映像系の会社に入社したボクは、よくそんなことばかり考えていた。ネクタイをゆるめ、深呼吸をして小休止するボクは、それでも銀色ボディの京浜東北線へと結局乗り込む。ゴシップ記事の中刷りを眺めながら視線を逸らすと、予備校の広告があった。

「偏差値40からの大学受験！」

（大学へ行ってもなあ……ていうか、学生ってみんなバカだよな！ バカ！ モラトリアム！）

そんな風に鼻息を荒くしたボクは、かつて偏差値70の典型的ガリ勉少年だった。あの先に待っていた未来が、こんな風だったとは。でも、いつか、いつか、いつか、キメてやる！ デカイ一発をカマしてBIGになってやる！ 根拠も自信も全くなかったが、気が滅入りそうになるたびに、そんな風に振るい立たせ、漠然とした妄想という名の未来に思いを馳せていた。

学習塾通いと思われる少年が、混雑した車内を縫い分け降りていく。

ま、キミもせいぜい頑張れ。



ボクが勤めていたのは、都内にある某映像プロダクション。製作からCG、編集、配給までこなす業界大手の企業である。大学卒業後、映画監督を夢見たボクは、野心ムンムンでこの会社の門を叩いた。とは言っても、本気で入りたかった会社ではない。

映画監督に一番近い道を探して、テレビ局やCM制作会社なんかも受けてみたがどれも失敗

してしまつたのだ。某キー局を受けた際には、七次試験のうち六次試験でもろくも失敗。ちなみに、六次試験の内容はデイベートとグループディスカッションであった。

デイベートは六人ほどの二グループが、「犬と猫、どっちがペットとして優れているか？」という議題についてバトルするものだった。

「犬は忠犬ハチ公に代表されるように、飼い主に対する忠誠心が高く、お手、おまわりといった芸事もすぐに覚えます。また、スイスのアルプス地方では古くから遭難犬としてセント・バーナードがもちいられ……」

（本当にそうか？ ウチの実家のバカ犬はお手を覚えるのに半年かかったぞ）

「断じて猫です。確かに忠誠心では犬より劣る面もありますが、そもそもペットの意義とはなんでしょうか？ それは癒しです。猫は現代のストレス社会の中、ぶつきらばうに、自由気ままに徘徊し……」

（本当にそうか？ 自由気ままなのは勝手だが、知り合いの家の猫はいつも階段から断じて動かず通行妨害するぞ！）

ハッキリ言ってバカらしかった。難関試験を突破してきた学生たちの目は妙に爛々らんたんとしている。ボクの隣に座っていた奴は、「就職活動こそが大学生活最大のイベントだ」と豪語していた。ま、そういう奴らと一緒に働きたくはない。結局ボクは「どうでもいいじゃん」と口パクで語

りながら何もしゃべらずデイベートは幕を閉じた。

続いてはグループディスカッション。与えられたテーマ「二十世紀最大の出来事は？」に対し、各自が五分ずつ意見を述べ、その後みなで話し合つて結論を出すというものだった。

（はて、みんな面白いことを言ってくるに違いない）

そう感じたトップバッターのボクは、インスタント食品の発明がいかに食を潤うるおし、人々に貢献してきたのかを、出前一丁からチキンラーメンまで交えて熱弁した。

ところが、ボク以降の面々は「第二次世界大戦」か「宇宙へ行った」の真つ二つに分かれてしまった。マッカーサーや、アポロ11号の間にチキンラーメンを挟む余地はない。こうしてあつてなくボクは敗退してしまつたのだ。しかも、最後に感想を述べる段階で「高崎君のチキンラーメンの話は面白いと思いました」とダシにされる始末だ。

そんな風な過程を経て唯一受かつたのが、この映像技術会社だったのだ。

配属された映画営業部は、アニメ映画の技術コーディネートというのが主な業務らしい。

聞こえはいいが、現実の仕事といたら、劇場公開される前の映画のノイズやパラ（フィルムに付着した汚れ）のチェック、それに高慢な態度のカントクやプロデューサーに、コーヒードリップするといったもので、誠に味気なく、不本意な日々だった。

幼児向けの動物アニメを五回も見たり、「カラダにワインが流れている」ことでお馴染みの

女優が、試写室にキャンキャンと鳴きやまない愛犬を連れてくるのを横目で見たり、上司の口臭をかきながら、着ぐるみのステージショーを眺めたり、そんな風にしてボクのプラスチックシヨンは溜まっていったのだ。

汗ダクになりながら、ワイシャツの袖をゆるめて、某駅付近のアニメ制作会社へと向かう。ボクの部署の顧客は、100%アニメ制作会社の主である。マニアにとっては、制作者の顔を拝めるのはこの上ない喜びだろうが、アニメなんて「ドラゴンボールZ」以来見ていないボクにとって、挨拶周りの営業は苦痛以外の何物でもなかった。

ボクの隣を油塗^まれで歩いているのは、通称バ課長。その激烈な口臭から女子社員に煙たがられている典型的なオッサンである。

「さっきの鴨南蛮、一五〇〇円の割には肉が硬かったなあ」

バ課長は独り言のように呟き、隣のボクは感情を込めずに「ええ……」と同意した。

かの主、店ではもちろん領収書を切っていたというのに、美食家気取りか。

バ課長と一緒に住宅街を縫い分け、客先を目指す。アニメ制作会社は、劇場映画のような華やかさとは違って変わって、静かな家並みの中ひっそりと存在するパターンが多い。

「ちよつとまだ早いかな」

バ課長が進路を変えて、付近の公園へと赴いた。ベンチに腰掛け、昼下がりの主婦の談笑が

聞こえる中、汗ダクのボクらはしばしの休養を取る。

胸元からマルボロを取り出し啜えると、バ課長の声が耳元でした。

「俺、タバコは二十歳の時にやめたからさ」

今度はアウトロー気取りか……と思いつつも「そうなんすか……」と静かに同意することにした。

目の前では、気ぜわしい鳩たちが餌を求めてポップと歌っている。その中にはいつたいたいどうしてこんな体型になったのか、丸々とプリマハムのようにでっぷりとしたものもいる。足を豪快にバタバタ踏み鳴らしてみると、数羽の鳩がパツと空に舞い、電線を越えて彼方へと消えていった。

バ課長は蕎麦屋からむしりとった爪楊枝を器用に操りながら、空を眺めている。

その横でボクはびしょびしょのハンドタオルで顔をぬぐっている。

(オレと鳩と、どっちがマシなんだろう)

そんな風に思っていた。



「高崎くん！ やる気あるの？ ちゃんとメモ取ってよ」
会社に戻ると、同期の藤井さんがまくし立ててきた。簡単な書類だというのに記入漏れがあったらしい。

「おい！ 君の取ったコピー、なんだか薄いじゃないか！」

営業事務のお局さんの怒号も遠くから聞こえてくる。

机の上のモニタを見るでもなくボンヤリと眺めていた。入社して数ヶ月がたつというのに、コピーも満足に取れず、同期の女の子にも完全に見下されている情けない次第だ。

入社当時、同期の面々と味わった座学の時間が懐かしかった。あの頃は、みながみな夢を語り合い、学生気分朝まで飲み明かしていた。もちろん中には、現実的保守的な奴もいて、資格の勉強をしているんだと飲み会をブツチする者もいた。そんな奴をボクやお祭り騒ぎ好きの奴らは「優等生」「ブレイン」などと影で小バカにしていた。

あれから数ヶ月、今度はまともに働かないボクがバカにされる番になった。「みんな映画を撮ろうぜい！」などと抜かしていた男は、今ではピシッとスーツを着こなし客先周りに忙しい。「CG制作以外なら辞める！」と豪語していた奴だって、人事部に配属され、今はリクルーターとして学生諸君に会う日々を送っている。

ボクだって決して手を抜いて仕事をしていたわけではない。ただ、なんとなく覇気が無かった。気がつくと、ボーっとしては妙な感慨にふけてしまう自分がいつもいた。映画制作の夢からかけ離れた現実を、現実として受け止められないもどかしさがあった。

やるせない気持ちになると、いつも便所の大の方に籠もって、あて先のない未来を思い描いていた。

（オレのやりたい仕事はゼロからモノを作ることだ！ それなら、辞めちまおうかな）

アンモニアガスが気分を落ち着かせるのか、しばし感慨にふける。

そんな時、なぜか浮かんできたのは、オヤジの顔だった。

就職決定後、引越しの手伝いをしにオヤジが上京してきたことがあった。

「とりあえず、三年は働けよ」

ワンカップを握り締めながらオヤジが言った。

「わかったよ」

別にこれといった名言でもないし、聞き流していた。

だが、その三年のなんと長いことか。ボクは半年で既に四苦八苦しているのだ。やがてオヤジは酔っ払い、フロアリングの床に小さく丸まった。ポケットから溢れたタバコはマイルドセ

ブンの1mgで、ボクの吸ってるマルボロの十二分の一の強さだった。

「けど、ほんとは……」

毛布をかけてやると、オヤジが小さく唸っている。

「生まれ変わったら二度とサラリーマンなんてやりたくないんだ、ほんとはな」

寝言のように漏らしたオヤジはやがて気持ちのよさそうな寝息を立てながら眠りについた。

新卒で入った中小企業に、一心不乱に三十年以上も勤めているオヤジは、先ごろようやく部長というポストを得た。不器用ながらも真面目に生きているオヤジのすごさを改めて感じたものだが、本人がそんな風に言っているものだから尚すごい。

アンモニア臭に耐え切れなくなり、ボクはデスクに戻った。電話の呼び鈴が慌しく鳴り響いている。ぼんやりとスクリーンセーバーを見ては自分もオヤジのようになれるのか、いやいやそれは無理だろうと繰り返して考えた。社長に直訴！

社長に直訴！

会社には三十名ほどの同期がいたが、その中にはたった一人だけボクと同じようなタイプの男がいた。彼は一見寡黙な存在だが、夢だけはやたらに大きく現実を現実と見ないようにしているタイプである。

Outlook Expressの送受信ボタンを押すと受信されるメールの95%はそいつからきていた。

「あのさあ、オレ、社長に直訴しようと思っっているんだけど。知っているだろ？ オレがVFXやりたいの？ それが今は現像液の管理だけ。ダサイ作業着着てさあ」

突拍子も無いことを言う奴だ。だが、彼がそんなことを言うのもそもそもはボクがハッパをかけたからだ。とある先輩がクリエイティブな仕事したいと社長に直訴し、大手映画制作会社に出向になったと先週話したばかりだったのだ。

「東が直訴するの？ 俺もやっちゃおうかなあ」

送信ボタンを押した後送受信を押すと、すぐに東からのメールが届いた。

「現在鬱蔓延中！ 今度のKで三人目だよー！ オレらも気をつけないな」

すかさず「お前に鬱はありえないだろ」と返事をする。送受信ボタンを押すと、また、東から別のメールが届いていた。ほとんどチャット並みの勢いである。

営業部に配属されたものの、客先周りの無い日は終日暇だった。というのも直属の上司であるバ課長がしょっちゅうサウナや喫茶店に姿をくまますから。放置されている間は、何もす

ることがない。「何か手伝えることありますか？」なんてそぶりも見せずボクはおなじく放置を食らっていた東と、「我らヒマジン」と件名に書いてはメールをやり取りして時間を潰していた。あの頃のボクは、そもそも働くということが何たるかをまるで理解していなかったらしい。

「な！ オレ、本当に社長に直訴するからな！」

東はそう最後に綴って、本日のヒマジンメールは終了した。思い込みと行動力だけはものすごいヤツだ。彼はCGクリエイターを志望しており、将来的には映画も作りたいとのことで休みの日はシナリオスクールに通っているのだという。休日はカフェでこれ見よがしにデッサンをしなから、店員の姉ちゃんに色目を使っているようなところもあったが、ボクと同じような趣味嗜好の人間だった。彼とやり取りする時だけが、会社で唯一ホッとする瞬間だった。



件名：直訴失敗

東からそんなメールが届いたのは翌日の昼時だった。

何でも、会議の終わった社長にちよつといいですかと強引に持ちかけ、嘆願書と題し熱き思

いを綴った封書を手渡したのだという。

「でさ、結論は、実績のないやつは異動させられませんかだよ。たしかにそうだろうけど、このままオレは現像液の中に沈没してしまうのかい？」

そんな風なメールが届き思わず笑ってしまいそうだったが、お局事務員がコホンと咳払いをしたので、とっさにこらえた。

「ねぎらいの言葉なんてかけないよ。オレもするから」

そうメールを送信すると「お前もやるのか!？」とほとんど回答を読みきったかのようなメールが同時に届いていた。

さすがに、封書を手渡しするような勇氣はないが、その日ボクは家に帰ると、熱き思いをA4用紙五ページほどにぎつしりと綴っていた。それは今考えるとバカバカしいものだが、「会社に眠る古い映写機を持って世界中の貧しい子供たちに映画を見せるプロジェクトをしたい」という内容のものであった。その昔阪神大震災が起きたとき、とある男性がチャップリンの映画を被災地で上映して反響を得たという話をヒントにしたのだ。普段なら見向きもされない白黒映画も極限状態の中では、人々の心を和ませる十分な価値があったという。だとすれば遠きアフリカのサバンナの奥地で暮らすホニャララ族たちに、「E. T.」や「スター・ウォーズ」なんかを見せるとどうなるのだろう。想像するだけで面白い。

翌日、先の熱き思いをメールにて社長宛に送付すると、数時間後、誠にアツサリとした反応が返ってきた。

「それは、ビジネスにはならない」

当たり前である。が、本当にそれだけで良いのか。不満を感じながら東にメールで愚痴ると、彼は爆笑し、2ちゃんねるのコピペで「終了」と書かれたメールを送ってきた。

あの頃のボクらは、本当にやる気もなく、自分のことを芸術家肌の特別な人間だとすら感じていた。だけど、このまま黙って働いていれば、数十年後は隣の席のオヤジ。未来は予測できなし、決してそんなものには巻き込まれたくないやと、突っぱね続けていたのだ。

アンパンマンの決意

シネマコンプレックスの一スクリーンのように広大な試写室で作品を鑑賞した後、ボクとバ課長は顧客と共に会議室へと赴いた。内線電話をフロントに回し、アイスコーヒーを人数分注文する。

「ダメだよなあ！ 色が全然ダメだよなあ！」

深々とソファに腰掛け、豪快にセブンスターを吹かしたのは某大御所映画プロデューサー。その横には、「ええ、そうですね」と小さく同意する若手映画監督の姿があった。ボクと年はそう変わらない。

「もう少し、シユワシユワつとこう、なんかはじけるような空の色とか出せないのかな」

プロデューサーが不満げにセッターを吹かす。ほんの一息だというのに、吸殻の先端が一気に灰と化した。

傍らにいたタイミング技師（フィルムの色調整を行うスタッフ）が、^{うやうや}恭しげに対応している。彼の抽象的な指示出しを少しでも具現化しようとしている模様だ。

やがてアイスコーヒーが届き、ボクはミルク、シロップと共にそれらを配り始めた。

「それから、あの夕焼けはさあ、ゴケミドロみたいな空にしないと……」

プロデューサーの発言は尚も続く。

ちなみに、ゴケミドロというのは数十年前のB級日本映画「吸血鬼ゴケミドロ」のことである。ゴケミドロな空のフレーズがオリジナルなものならともかく、それはタランティーノの「キル・ビル」監督時のセリフに由来する。

プロデューサーはほとんど二口ほどでアイスコーヒーを飲み干すや否や、「おかわり！」と

ぶしつけに言った。急いで、内線電話で追加オーダーを注文する。

ボクは、彼らの存在がうらめしかった。スーツなんてほとんど着ない人種なのであろうか。監督とカメラマンは、ジーンズ、トレーナーというラフな人たち。プロデューサーにいたっては、ジンベエのような代物を着ている。おしゃれなのかもしれないが、貧相な彼が着るとただの寝巻きにしか思えない。一方こちらはスーツに白ワイ。お客だからこそもちろん丁寧な姿勢で対応しなければならぬ。

(コンナハズじゃあなかったのにな)

心の中でふと思う。映画監督を目指しているというのに、映画に近いようで最も遠い存在じゃあないか。確かに、この仕事を続けていければ映画のエンド・ロールに「ポストプロコーディネーター」や「ラボ・マネジメント」といったよくわからない名称で載ることはある。しかしだからと言って、ボクは見積もり請求を立てたくてこの会社に入ったわけではない。

やがて、アイスコーヒーが届けられ、受け取ったボクはそのまま斜め四十五度先のプロデューサーの前に置いた。すると、またしても二口ほどで飲み干しおかわり攻撃をするプロデューサー。周りのスタッフは彼の怒号に気を使いながら、神妙な面持ちで対応している。ボクがやりたい仕事はこんなことじゃない。



「やあ。コーヒー星人だったなあ。あのP」

仕事帰りの五反田界隈。バ課長がどこからか取り出した楊枝を操りながら呟く。

「テレビで見る紳士的な態度と全然ちがいますね」

そうポソッと呟くと「ギョーカイジンってのはンなもんだあ」とどこか冷めた答えが返ってきた。

小雨が降り始め、目の前を足早に帰り支度の仕事人たちが駆けていく。唯一街にたむろしているのは、キャバクラの勧誘くらいだ。

「ちよつと、寄ってくかあ」

バ課長が上機嫌で煌びやかなネオンに向かっていく。ボクもその後に従うことにした。

店内に入ると、艶やかなドレスを着た女性たちが出迎えてくれた。正直、こういう店に入るのは初めてである。おしほりを出され、タバコを啜えれば火をつけてくれる。金で買うサービスとはこういうものらしい。

やがて、シャンパンや焼酎のボトルが豪快に運び込まれると、バ課長は勢い良く呷り始め、あつという間にゆでだこのようになってしまった。

「おかわり！」

バ課長はそう言うや否や、カラオケステージにダッシュし、いつの間にリクエストしていたのか、梅沢富美男の「夢芝居」を歌い始めた。

ボクは少し薄めの水割りをチビチビ飲みながら、あたりの様子を観察していた。酒ヤケのダミ声で騒々しい歌声をあげるバ課長。その横で、「笑っていいとも」の観客バりに息のそろったエールを送るキャバ嬢たち。ボクの隣に座ったキャバ嬢は、新人らしく何となくごちない動きで空いたグラスにシャンパンを注いでいる。まるで、数時間前の自分を見ているようである。やがて、盛大な拍手に後押しされ、バ課長が戻ってきた。目の前のシャンパンをひと飲みし、「タバコをくれ」と、二十歳でやめたはずなのに指で合図してきた。

「高崎は、なんでこの会社に入ったの？」

煙を噴き出したバ課長が、ややむせながら呟く。

「はい……映画を作りたいと思ひまして」

「おお！ オマエも？ ボクも実は撮りたい映画があつて、十年くらいかけて脚本書いてるんだけどね。まだ未完成だが、これが戦争の話なんだけど面白くてね……」

空調の効いた室内でも脂ぎったバ課長が語つてゆく。B 21がどうだ、硫黄島がどうだ、特攻隊だの、ひめゆりだの。

「で、まあこんな感じなんだが、キミはどう思う？」

当然のごとくドン引きなボクが言葉に詰まっていると、気を利かせたキャバ嬢が言う。

「よくわかんないけどすごくイイです！ 夢を持つてる男性つて素晴らしい！」

「おう！ そうかい!？」

ご満悦なバ課長は、満面の笑みを浮かべてキャバ嬢の手首を撫でた。

その瞬間、ボクは自分の未来を悟つた。中途半端な環境に満足して働いていると、それに甘んじて結局何をすることもなく、頭は禿げ、口臭は生乾きの下着のごとく、油まみれの肌と、メタボな体型ができあがってしまうだろう。隣の机のコイツがボクの未来だというのか。



翌日、土曜日の朝。ねぼけ眼でテレビをつけると、アニメ「アンパンマン」がやっていた。ボンヤリと見とれてみると、オープニングテーマが始まった。

「なにが君のしあわせ なにをしようよ わからないままおわる そんなのはいやだ！」

その瞬間、何かが崩れ落ちるのを感じた。心の中で、理性、社会人、肩書きといったものが全て、ドサリと崩れ落ちる物音が聞こえてきた。机の引き出しから、百円ショップで買った白封筒を取り出し、「退職願」と書き記す。便箋を取り出し、はて退職願は一体何を書けばいいのだろうか、とフォーマットを考えているうちに、いつの間にかオヤジの顔が浮かんできた。テレビの上には皮肉にも、夏休みに同期と海の家へ遊びに行った写真が飾られてある。

本当に良いのだろうか。幸い、あと数週間働けば正月休みに入る。いやしいながら冬のボーナスも幾ばくかももらえるだろう。その間に考えが変わらなければ……

携帯を取り出し、実家とメモリされた番号にコールする。入電するや、寝ぼけたオヤジの声がした。

「おう……ケンかぁ」

「あんな……会社辞めようと思って」

息を飲みながらも一気に口走る。

「は？」

電話の向こうでゴホゴホと咳払いのようなものが聞こえた後、長い沈黙が走った。

「なんで、また急に？」

オヤジの小さな声がする。

「オレさ、やっぱり制作の仕事がやりたいんだよ。この会社にいたら……」

思いの丈を全て語った。

すると、オヤジは意外なことに「次の職場が決まってからにしろよ。頑張れよ」と言い放ち、その数秒後に電話を切り終えた。

意外なほど、あっけなかった。話のわかる親である。心の中が、なんとなくスッキリしたような気にもなったが、始まりはこれからである。

「三年も持たずにゴメンなさい」

言いたくても言い出せなかったセリフを独り言のように呟き、ボクはテレビの上の写真立てをパタリと伏せた。

謹賀新年、退職致します！

二〇〇三年一月四日。仕事初め。

「あけましておめでとうございます！ 正月早々なんですですがこれを……」

そう言ってボクは、「退職願」と書かれた安っぽい白封筒を差し出していった。

少しばかり憂鬱な年越しを過ごしたものの、ボクの中での結論は何一つゆり動かなかった。

いろいろ考えたが、隣の席のコイツには絶対なりたくない！ という思いは想像以上に強か

った。

「辞めるのは勝手だけど、クセになるぞお」
バ課長が少しも動揺を見せずに呟く。

(け、何を言いやがる……今に見てろよ)

そんな風にコメカミあたりの血管が浮き立つのを必死にこらえる。

「三年も続かないようじゃ、どこ行っても続かないぞ」

バ課長が、大量の領収書をさばきながらポツリと呟いた。

オヤジと同じセリフを言うのが妙に鼻につく。

「今までお世話になりました!」

一際強い口調でボクは言い放った。

そうだ、これでいいのだ。これで良かったのだ。

これから、ボクの未来が始まるのだ。



数日後、恵比寿ZESTでしめやかな送別会が行われた。意図的に少し遅れて会場内に入る

と、既にほとんどの同期がお誕生日席を空けて座っていた。

「ほんとうに辞めちゃうのかあ」

「早すぎるよ」

「もつたいなくね?」

そんな言葉を次々にかけられるも、ボクは適当に相槌を打ってスルーした。何かもつたいないだ。もつたいないと言った彼は、つい先日「やりたいことと今の仕事が全然違う」と嘆いていた男だ。現状に満足していないはずなのに、どうしてそんなことが言えるのだろう。厚生年金や健康保険がもつたいないとも言うのか。

「次の仕事もがんばってね」

同期の中で一番かわいいHさんがさわやかな笑顔で声かけてきた。

(ああ、がんばるとも)

次の仕事場は既に決まっていた。テレビ番組制作会社のADである。報道番組を中心に作っている会社だが、映画に一番近いと思われるドラマ班を志望すると、社長の心意気で半年間はドラマの現場で働くことになった。過酷そうだが、やりがいはあるに違いない。

やがて、酒を酌み交わし、思い思いに近況を語り合った面々だが、なんとなくボクは場になじめずにいた。一緒に入社した仲間だというのに、幅の広いテーブルのせいもあるが、彼らの存在が随分遠くに見える。話を聞く限り、みな真面目に働き少しずつだが何らかの技術を習得

しつつあるようだ。特に女の子の変わりっぷりは目覚しく、入社当時「将来は雑貨屋さんになりたい」と言っていた子だって、今は目にクマをつくり肌はボロボロになりながらも毎日終電近くまで頑張っているようだ。対し、ボクはコピーもロクに取れないデクノボウである。

ボクは彼らの適応性がうらやましくもあり、どこかバカバカしくさえ思っていた。仕事の合間に本当にやりたいことを追いかけるタイプの奴も何人かはいたが、ほとんどが、なんとなく言い訳をしながら働いているような奴らだった。

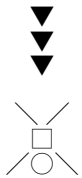
「でもさー、新卒にしては給料いいし、まあめぐまれているよな」

入社当初みんなで映画を作ろうよと叫んでいたヤツが言った。彼のがなんとなく、哀れに思えてきた。でもさーの前置詞は、一体何なんだよ。

やがて、ボクらは朝帰りをするでもなく、一次会であっさりと解散した。久々に集まったのに名残惜しい気もするが、まあ、世の中そんなもんだらう。

あの時のボクは甘っちょろいバカな青年だった。

せっかく送別会を開いてくれた仲間にさえ、うがった見方をしてしまう自分がいた。何もしない自分のことは省みず、傍観者のような視点で周囲を見つめては心の中でダメ出しを続けていた。おそらくは、それくらいしかバランスを取る方法がなかったのだろう。



職場の面々から餞別でもらった一万円の商品券を会社近くの大黒屋で現金に変えたボクは、これから待つ未来にワクワクしていた。ネクタイをゆるめ、線路沿いにある十ヶ月過ごした要塞を見やる。毎朝、会社へ行くときは、目の前のアスファルトの道とMDウォークマンから流れる音楽しか意識していなかったが、こうして見ると意外に大きな会社だ。二十時を過ぎても尚煌々と光る各階の窓。あの奥では、送別会の後仕事に戻った同期が懸命になって働いている。入社当初は、毎日の座学研修が終わるたびに、居酒屋で終電ギリギリまで飲み明かしてお互いの夢を語っていた。映像系の会社らしく、クレイジーでアナキーな奴らも多く、話題が尽きることは無かった。だが、それから半年もすると、三分の一はバリバリ働き、三分の一は不満を抱きながら働き、三分の一は死んだ魚の眼をして働いている。目の前に立ちはだかるゲンジツという壁は大きく、徐々に受け入れられるものと食み出ていくものに分かれていく。

ボクが一番最初に食み出た退職第一号だった。

「バカ野郎！」

漆黒の夜空に聳える古巣に向かってボクは叫んでいた。

今思えば、待遇も良かったし、そんなに酷い会社でも無かった。優しい先輩たちもたくさんいた。だが、あの時のボクは、目の前に広がるツマライ現実を自分以外の何かのせいにしたがっていた。たとえるなら自分は籠の中の鳥のような存在だった。この籠がはずれたら飛べるんだ。いつだってそんな風に思っていた。

すべてのやつかみを周りのものにぶつけ、遠き未来に夢をはせていた。エラそうに、自分の力を過信しながら、特別な存在なんだとどこかで思っていた。

夜行列車がギリリとした閃光を上げながら目の前を通過していく。暗闇の中でもハッキリと分かる真っ青なボディ。ボクの憧れは、どこまでも走り続けるブルートレインだったのだ。

第二章 夢の先に待ち受けていたボロ雑巾生活！

憧れのテレビマンへ

渋谷センター街をまっすぐ突っ切った先にそのスタジオがあった。

正面の自動扉を抜けると、ヨボヨボの警備員が立っている。

「はじめまして。今日から働く高崎です」

受付で入館証を受け取り、2Fに上がる。外から見るとだだっ広い巨大な建物に見えたが、入り口は思ったより小じんまりとしており、階段も古くさびれている。場末にでもありそうな公民館といった感じだ。本当にこんなところで有名芸能人が仕事をしているのだろうか。

フジテレビのドラマ班に配属されたボクは、このスタジオがメインの職場となると聞いていた。デスクワークをする場所もスタジオに近いほうが何かと都合がいいとのこと、スタジオ内にはパーティーションで区切られた幾つもの小部屋があり、スタッフたちはそこに常時待機していた。

早速扉をノックすると、長身のヒョロリとした男が現れた。

「セカンドADの堀です。よろしく」

小部屋は、十畳ほどの広さで、そこにはスタッフたちがひしめき合うように座って仕事をしていた。ボクが務めるのは五人いるADの五番目（ファイブス）で、その上には、チーフ、セカンド、サード、フォースの四人のADがいた。空いている席にチョコリと座ると、両サイドからはモクモクとノロシのような白煙が舞っている。どうやら、いまだ喫煙し放題の職場のようだ。

スタッフに一通り挨拶を済ませた後、堀さんが呟く。

「これ、台本。あんな、適当に消え物リストアップして、デザインとか考えといて。あとさ、割本は作れるの？」

(はて?)

何のことやらさっぱりわからない。困惑していると、「なんや、AD全くの初めてかー！しょっぱなから連ドラかあ。そりゃエライ苦労するわあ」と堀さんがボヤいている。

「んじゃ、まずはドンキやな」

堀さんはそう言うやいなや、ボクの左腕をグイと掴んで立ち上がった。



堀さんが向かった先は何のことはない、渋谷のドン・キホーテである。

「えーっと、まずはガバチョ二本に、ビニテは三色くらい、カッター、マジック、水平計、パーマセルはあんのかな？」

次々に黄色い籠がいっぱいになっていく。

「ガバチョって何ですか？」

そう尋ねると、「ガムテープや。色々使うの」というぶっきらぼうな答えが返ってきた。

後で知ったが、ガバチョは、主に役者の立ち位置を示す（業界ではバミると呼ぶ）のに使われ、T字型にして床に張られる。もちろん布ガムの方が剥がしやすく良い。ビニールテープや、パーマセル（写真撮影で使われる黒テープ）も同じような用途で使われるが、パーマセルが一番跡が残らずはがし易いため、値段も高価である。

「あとは、これ。ずた袋」

堀さんはそう言っつて、ボクの腰に細かなポケットがついたウエストポーチのようなものを括りつけた。この中に、先ほどの道具を詰め込んでいくのだという。テレビ番組で、こういう袋を身につけダッシュするADの姿を何度か見たことがある。

「おう！ 一丁前のADさんやないか」

「ありがとうございます！」

礼を言うと堀さんは続けた。

「悪いが、全部キミの自腹やからな。会計よろしく」

総額一万円。ちなみに、この時ボクの給料は手取りで十五万円弱だった。

極貧生活は既にこの時から幕を切っていた。



こうしてボクのAD生活は始まった。はじめの一週間は十時出社の二十二時上がりという規則正しいもので、週に一度の休みは日曜日だった。撮影はまだ始まっていないので、メインの仕事は台本を見ながら、ちょっととした小道具（劇中に登場する酒のラベルや、架空の雑誌の表紙など）のデザインを考えたり、台本で登場する未定の固有名詞（架空の大学や病院の名前など）を考えることである。

ドラマは映画配給会社を舞台に、主演の男女が恋に落ちていく物語であったため、劇中には架空の映画のポスターや、パンフレットが幾つもあった。そのため、ノートに次々とデザインやタイトルを考え記していくわけだが、当然役者や小道具の数も限られているため、できるだけ低予算で素早くスチール撮影できるようなものでなければならぬ。たとえば、「スター・ウォーズ」のように大勢のキャラが登場するSF映画のポスターを考えても、劇中に一

瞬映るか映らない程度のものであるから、そんなに時間をかけてもいられないでしょうということだ。

ちなみに、ボクが考えた架空映画のタイトルは以下のような感じである。

「悪魔の人食い毒鍋屋」

「ハッケヨイ！ オゴポゴ！」

「小さな恋のロマンス」

「昇竜拳ムラサキ」

「踊るコマンドー」

全くもってデタラメであるが、これなら鍋やマワシ、カンフー衣装、モデルガンなどのちょっとした小道具で制作できると考えたからである。被写体になるのは基本的にモデル事務所やエキストラ事務所に所属する役者の卵であるが、人が足りない場合はADやスタッフを起用する。実際、ボクは「昇竜拳ムラサキ」の親玉としてポスターに顔を出し、ちゃっかり劇中にも登場している。ちなみに、「悪魔の人食い毒鍋屋」に関しては、せっかくポスターを作ったのにも関わらず、プロデューサーの「人食ってテレビ的にマズイでしょ」の一言で、NGとなってしまう。こういった小道具の制作は、本来は美術部の仕事になるのだが、ADは基本的

に何でも屋であるため、どんな仕事のヘルプもこなさなければならない。

小道具の制作や現場以外のADの仕事といえば、電話取りにスタッフの食事の買出しや掃除といった雑用がほとんどである。買出しというと、楽そうにも思えるが、富士そば十人前を一人で買いに行く姿を想像して欲しい。土曜の午後。渋谷センター街は多くのカップルで賑わっている。そんな中、汗がこぼれんようにこぼれんようにと、祈るような気持ちでヨタヨタとビニール袋をひっさげ歩いていく姿。

「なんだかなあ」

独り言をボクは呟き、一体何のために大学を出たんやらと疑念にかられるのであった。

睡眠二時間、時給二〇〇円の日々

トイレで用を足した後、すれ違う長身の男に一瞬にして釘付けになる。

「江口洋介だ！」

「愛という名のもとに」「東京ラブストーリー」「ひとつ屋根の下」……ボクが好きなドラマの中ではいつも江口さんがアニキ肌で強烈な演技をしていた。今回の主役であることはもちろん知っていたが、いざ当人を目の前にすると、全身凍りつくようなオーラを感じてしまう。

(うろうろ……サインもらおうかな)

一瞬、そんなことが頭をよぎるが、バレたらこっぴどく叱られるだろう。A Dと役者は、ファンとスターの関係ではないのだ。そんな風に思いながら、会議室の扉を開けると、そこには名だたる有名俳優が勢ぞろいしていた。

本日は、顔合わせと第一話の本読みの日である。本読みとは、台本に書かれた台詞を役者が読み上げていくものである。台詞の行間のト書きはチーフA Dが読み上げていく。四角形に並べられた長机に、役者やスタッフが鎮座している。

「高崎！ お茶出して」

チーフA Dの大林さんにそう言われ、紙コップにコーヒーを注いでは、他のA DやA P（アシスタント・プロデューサー）と共に配っていく。テーブルの周りには、タレントのマネージャーと思われるスーツ姿の人々が立っていた。紙コップを持ち、マネージャーの一人に渡そうとした時だ。

「バカ！ マネージャーはいいの」

大林さんに後ろからこづかれ、意味もわからず「すみません」と小さく謝る。後で知ったがマネージャーに対しては何の気遣いをする必要もないという。それどころか、A D以下に思ってしまえということだ。もちろん、最低限の敬語は必要なのだが。

「まずは、○○役の江口洋介さん！」

セカンド堀さんが次々に出演者を紹介していくたびに、あちこちから拍手が沸き起こる。

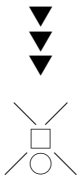
机の一角には、小学校低学年くらいの子供がいた。

「よろちくお願いします！」

子供が叫ぶとあちこちから微笑ましい拍手が沸き起こる。立ち見席の中で、大げさに拍手をしている三十半ばの淑女がいた。間違いなく、子供の母親なのだろう。どこか誇らしげにニンマリと笑っている。

ちなみに子供の台詞は、わずか四語の一言である。おまけに一話のみしか登場しない。

ほとんどエキストラ並に思えてしまうが、ドラマの世界ではたった一語でも台詞があるのと無いのではまるで扱いが違う。台詞があつてこそ、役者としての仕事が始まると言えるのかもしれない。



「今日はポパイだよお」

制作スタッフが叫ぶと、あちこちから歓声が沸き起こった。早朝六時のスタジオ駐車場。今日からいよいよ撮影が始まる。クランク・インだ。ボクは、美術部の移動車への機材や小道具

類の搬入を手伝っていた。始発電車で来たボクは、前日に言われたとおり、ドラムバッグに一週間分の衣類を詰め込み、スタッフ・ルームの席の下に置いておいた。撮影が始まると、家には週に一度ほどしか帰れなくなるらしい。これから過酷な生活が始まるのだろう。まだ青白い二月の寒空に向かって、ボクは白く深いため息をついた。と、パイプ椅子に手をかけながらその中に一際頑丈そうな椅子があることに気がついた。緑の生地にdirectorと白字で書かれてある。監督専用のディレクターズ・チェアのようなようだ。いつになったら、ボクはこの椅子に座ることができるのか。

「高崎くん。今日はポパイだから楽しみだな」

「ポパイって、アニメのですか？」

「ハハハ。そっかあ。キミ、初めてだったもんな」

制作部の有野さんが、そう言って笑った。

「弁当だよ。ところで、キミいくつなの？」

「二十四です」

「うひゃあ！ タメだあ。じゃ、これからお互いタメ語っつーことでヨロシク」

有野さんはそう言うと、慌しくどこかへ消えていった。入社前、弁当配りはADの仕事だと思っていたが、ドラマの世界では制作部の仕事らしい。ちなみに制作部は、他にロケ地の手配や、野次馬整理、ゴミ掃除から、寒い冬にはホッカイロなんかの備品も用意する。上から順に、制

作担当、制作主任、制作進行と位置づけがあり、有野さんは一番下っ端の制作進行だった。いわば、ボクと同じボロ雑巾である。

「おーい！ ボヤボヤすんなあ！ 行くよ」

遠くからフォース河野さんの声が聞こえる。ダッシュで向かうと、そこにはスモークの張られた巨大なロケバスがあった。中に入ると、眠そうな顔をしたスタッフたちがひしめき合って座っている。

「一、二、三、四……」

河野さんが、乗員リストを眺めながら人数確認をしている。後で知ったが、現場によってロケバスに乗るメンバーも微妙に変わるため、発車前には常時メンバー確認をしなければならぬ。これも、ADの仕事であった。

「出発します！」

河野さんの一言の後、バスはゆっくりと動き始めた。ボクは、ゴミ袋に一番近い位置に陣取り、指示されるがままポパイの弁当を、後ろへ後ろへと配り始める。みな食べ終わった後には、容器を回収してゴミ袋に捨てねばならない。小さなスチロールのバックを開けると中には、小ぶりなおにぎりとか揚げやウィンナーが入っていた。

(なんだ、こんなもんか……)

芸能人が食う弁当だと期待していたのに、中の具材は意外なほど質素なものだった。

だが、一つ口につけると、素朴ながらも甘みのある米の味を感じる。

(美味しい！)

少しだけ、ホツとしたような気分になる。緑茶を飲み、外の景色を見やると、コバルトブルーの空の下、カラフルな車の照明がポツリポツリと光っていた。まだ、通勤ラッシュまでだいぶあるだろう。あちこちからイビキが聞こえたことを確認し、ボクはゆっくりと眼をつむり、寝息を立て始めた。体中のあちこちで、筋肉が悲鳴をあげている。重い機材を運んだせいだろう。その時である。

バコッ！ 勢いよく、頭をこづかれたかと思うと、目の前には堀さんのギョロつとした目があつた。

「バカ野郎！ サード以下は寝ちゃいけないの！ それから、現場に着いたらサイドブレーキがギユッて引かれたタイミングで、到着ですつて言うんやぞ」

そう言つて、堀さんは何事も無かつたかのように、スヤスヤと寝息を立て始めた。その横には、カクンカクンと時折首をふらつかせながらも、血走る眼を必死に開けている河野さんの姿があつた。

(これは、とんでもない世界に来てしまったなあ……)

重たいまぶたをこじあけながら、そう思った。



「到着です！」

河野さんの一声で、スタッフたちは背伸びをし始めた。どうやら、眠りこけてしまったようだ。一日十時間は寝ないと頭が重いという体質……ボクはこれまでの不摂生を呪つた。二秒で飛び上がり、バンの外へと飛び出す。見たこともない、洋風の建物が石畳の両脇に並んでいる。その対面には、パステルカラーの巨大な映画館があつた。ここは一体どこだろう。

「高崎！ 早く機材運べよ！」

堀さんの号令と共に、ボクはバンからの荷物を担ぎ、大勢のスタッフの後ろを金魚の糞のようについていった。ちなみに、こうした現場は事前にロケハン（ロケの下見。監督やカメラマン、チーフADなどの少人数で行われる）されており、既にどのあたりにカメラを置いて、監督やビデオエンジニア、音声が待機するかは決められているとのことだった。

一方、見慣れない土地に「ここはどこだよ？」と当惑していたボクは、拳動不審者のごとく辺りをさ迷っていた。やがて、準備が終わると、ドライという一連の演技の説明が始まった。

監督が、役者やスタッフにその場のシーンの流れを説明していくというものだ。

「ハイ！ まず、この通りで映画祭パレードが行われているという設定で、通り抜けていくんだけど……うーん、この時飲み物を持っていた方がいいかな」

監督がそう言うと、セカンドの堀さんが素早く自分の台本を丸めたものを、手渡した。

一体、何をしているのだろう。

「で、この飲み物を、こう渡す」

監督は丸まった台本を持って、役者の一人に渡す仕草をした。なるほど、台本は飲み物代わりの即席品だったというわけか。台本に、飲み物があるなどは、一切書かれていないため、ADたちは監督の指示に耳を傾け、その場その場で対応していかなければならない。

「ハイ！ こっから、彼が歩き出す」

監督がそう言うや否や、今度は河野さんがスタート位置に、T字型の布テープを貼った。見ると、河野さんのジープには、幾つものTの字が刻まれている。いつの間に準備していたのだろう。

ドライが終わった後、役者は控え室か待機場で待ち、その間にスタッフはカメラや照明の準備をし始める。ADたちは、スタンド・イン（役者の代わりに、カメラワークやライティングを確認するために立つ）をしたり、撮影に邪魔なものをよけたりする。気がつくど、空はすっかり白味を増し、パレード撮影の場にはギャラリイとして参加する大量のエキストラたちが集っていた。ボクら下っ端ADは、メガホン片手に群衆整理を行う。

「静かにしてくださいー！」「役者さんたちの写メは絶対撮らないでくださいー！」

そんな風大声で叫びながら練り歩いていると、時折、妙な視線を感じた。エキストラの大半は、芸能人見たさや趣味でやっている人たちがほとんど。だが、中には俳優志望の人たちもおり、その中にはボクらのようなスタッフに憧れを抱く者も少なくないという。「業界人ってカッコイイ」そんなところなのだろうか。実際、ADの中にはエキストラと付き合う者も多いそうだ。

斜め上を見やると、大掛かりな鉄塔が聳え立っている。その上には、チーフカメラマンの姿がある。上から俯瞰で撮影するのだろう。その横には、ディレクターズチェアに座る監督がおり、神妙な面持ちで辺りを眺めていた。

やがて、河野さんが「お願いしマース」の声と共に役者たちを引き連れ歩いてきた。何百人というエキストラが「ウギャー」と奇声をあげる。深めの帽子をかぶった吹奏楽隊でさえ、眼はそっちの方に釘付けになっているようだ。

「本番いきまーす！ 五秒前、四、三、二……！」

チーフ大林さんの拡声器の音が辺りにこだまする。やがて、吹奏楽隊のトロンボーンが奏で始められると、ギャラリイは事前に指示されたように小さな旗をパタパタ振り始めた。レッド・カーペットの上を、偽者ハリウッドスターの外人が黒服のSPと共にゆつくりと歩き始め、本物の役者たちは、映画祭に駆けつけたという設定で、その合間を駆け抜けていく。いつの間にか広がっていた青空に、美術部が徹夜で作った紙ふぶきと、特殊効果の白煙が舞い始める。

「カット！ OK！」

やがて、鉄塔の先端から監督の声がこだまし、シーンは終わる。その瞬間、再び芸能人の名をギャーッと叫び始める群衆の中、ボクは青空に一番近い監督を、素直にカッコイイなと思っていた。



こうして、ロケは始まった。毎朝眠い眼をこすりながら、ロケバスに乗り込み見知らぬ現場へたどり着く。狭い居酒屋などに大型の機材や、鉄のレールを運ぶのは至難の業で、ボクはいつもビクビクしながら仕事をしていた。だが、ロケではたまにオイシイこともあった。高級焼肉屋のシーンでは、撮影終了後にわずか一分だけ余った肉を食うことを許され、ほとんど生肉の状態で口の中にあるだけ放り込んでいた。また、変態と思われるも仕方が無いが、某有名女優が口をつけた割り箸に、こっそり間接キスをして一人悦に入っていたこともある。

ロケは週四日行われ、残り二日間はスタジオ撮影で、日曜日は撮影が休みとなる。そのため、土曜の夜には帰っていいことになっていたが、結局日曜日の朝にはデスクワークのために出勤しなければならなかった。洗濯機に一週間分の汚れ物をブチ込み、部屋干しし、翌朝には生乾

きのままの衣類をドラムバックに放り込み、また家を後にする。ハッキリいって憂鬱な毎日だった。

だが、楽しい時もあった。その日の撮影が終わると、上の方のスタッフ達は次々と家に帰っていく。残っているのは、いつもフォースの河野さん、制作進行の有野さんとボクだった。狭いスタッフルームにはお歳暮で芸能プロダクションからもらったという、缶ビールの箱がうず高く積みまれてあった。ボクらはこっそりビール片手に仕事をする。ここからは、タメ語ワールの始まりだ。

「つーか、河野さん。また立ち寝してたでしょ？」

有野さんが言うのと、「しょうがねえだろ。秘孔付きやつても効かねえんだから」そう言って、河野さんは、両サイドの眉の外側をグリグリ付いてみせた。

秘孔付きというのは、ボクらがやっていた眠気覚まし的一种で、「北斗の拳」の技に由来する。だが、本当に眠たいときは結局何をやってもダメで、ボクも河野さんも座った後五秒以内に確実に瞼を閉じていた。

河野さんは、割本を作っているようだ。割本とは、台本を細かくした一日分のシナリオやスケジュールが詰まったものである。一度、ボクにも作らせてくれと頼んだことがあるが、にべもなく断られた。彼は割本こそが、自分をアピールする唯一の仕事だと思っているらしく、表

紙には毎日オリジナルの川柳を載っけていた。そのためか、スタッフや俳優にも「今日の川柳は良かった」などと声をかけられ、可愛がられ、その度にボクは日陰に立った自分を憂いていた。「ところで、高崎はなんで、この仕事始めたの?」

「監督になりたいんすよ」

「やっぱりな。俺もそうだよ。でも、キミなんて制作会社から出向だから、いいよな。俺なんてフリーで月十七万の上に、何かあったら即効クビ切られるよ」

河野さんがコピー機をうならせながら言う。フリーでもセカンドくらいになれば、月五十はもらえるらしいが、フォースだとそんなものなのか。

「それにこの前、家帰ったら、光熱費の請求書が滅茶苦茶たまってたし、ああ、ほんと、おうち帰りがよー」

河野さんが涙声をあげると、「まだいいじゃん。俺なんか、去年一日しか休みなかったよ。一月一日のみだよ」と河野さんが呟く。

「一日!! すると、三六四日は働いてたの?」

ボクが声をうわづらせると、河野さんは「ああ、そうだよ」とサラリと言った。

聞けば、彼は映画プロデューサー志望なのだという。プロデューサーを目指すなら、アシスタントプロデューサーで修行というイメージがあるが、彼曰く何事も「現場を知っていなきや」

とのことだ。

ボクは、自分と河野さんとの間に歴然とした壁があることに気づいていた。

映画監督やプロデューサーになるためには、ここまでしなければならぬというのか。

ドラマ・プロデューサーの現実

深夜のスタジオは驚くほどひっそりとしており、明かりがついているのは、演出部と美術部のフロアのみだった。美術部付近には、学園祭前の放課後のように、大掛かりな装飾品やスポンサーから支給された着ぐるみが並べられてある。下着一式を持ったボクは、そんな光景を眺めながら、スタジオを後にし、近くのカプセルホテルへと向かう。

AM2:00

これからひとつ風呂浴びて、明日(今日?)の朝5:00には起きねばならない。いつものようにフロントでモーニングコールを申し出、地下1Fの浴槽で汗を流す。入院患者のような青く薄いパジャマに身を包み、休憩所で一年付き合ってる彼女におやすみメールをする。そして、発泡酒を飲みながらタバコをふかす。わずかながら、一日で唯一リラックスできる時間だった。

「おうー！」

突如浴びせられた声の主を見やると、プロデューサーがハイライトを吹かしていた。零時前に帰ったはずなのに。終電を逃したのか。それとも家に帰れない事情があるのか……

「キツイだろ？ 現場は」

「はい」

素直にそう答える。

「俺もここまで来るのに、二十年。今じゃ現場行っても見てるだけだもんなあ……」

そう言っただけは小さなため息をついた。

「ぶっちゃけ、羽振りいいんですか？」

勢いで尋ねてみると「ハハ。それでもないよ……」という答えが返ってきた。

ハイライトの煙から労働者の香りがする。

「ほら、あっちの方は局で、俺は同じPでも制作会社の人間だからさ」

ドラマには二人のプロデューサーがいたが、一人は三十代の若いテレビ局の人間だった。そのため、給料や出世のスピードにも雲泥の差があるようだ。二十代前半の就職活動で、これほどまで大きな差が出てしまうというものなのか。そう思うと、プロデューサーという肩書きながら、目の前の白髪交じりのオヤジが、なんとなく哀れに思えてくる。

「彼女はいるの？」

「はい、一応」

「寂しがつてると思うよ。付き合うなら、ナースがいいよ」

「時間不規則だからですか？」

「そつ。まあ、バツ二の俺が言うのもなんだけだな」

そう言っただけは小さく笑った。この業界は離婚率が高いとも聞く。不規則な生活でプライベートの時間がほとんど無いためだ。

「寝坊すんなよ。じゃあな」

去っていく彼の小さな背中を見ながら、彼がなぜこの仕事をここまで続けているのか、続けられているのか、頭の中でグルグル考え続けていた。

涙のトンカツ弁当

棺おけのように狭い、かまぼこ型の空間にAV女優のアエギ声がかたまっている。テレビをつけっ放しのまま眠ってしまったのだろう。眼をこすりながら、携帯の液晶画面を開いて地獄を見る。

六時間以上の大遅刻だ。早速先輩A Dに電話をするが、案の定繋がらない。猛スピードで身支度をすませ、タクシーに乗り込み、割本から推測される現場に直行する。視界から見える白光や、幸せそうな街の風景を全て呪った。頭の中がパニくり、タバコを吹かすも、すぐに煙で咳き込んでしまう。

ようやく、現場のオフィスビル前にたどり着くと、案の定撮影は始まっていた。だが、幸いにも昼ごはん時であったようだ。休憩するスタッフの様子が見受けられる。

「すみませんでした!!!」

大声で叫びながら、タクシーの扉を開けると、制作担当が領収書を渡すよう促してきた。

「どうやら、立て替えてもらえるらしい。」

「すみませんでした!!!」

あちこちで、大声量を上げながら練り歩いていると、「あ、ネボスケが来たな」とか、「重役出勤かい?」という何とも微笑まじげなジョークが聞こえてくる。

八つ裂きの刑とか、体育館裏でのなぶり殺しを予感していたのに、この温度差は一体? そう思いながら、さらに謝り倒していると、チーフA Dの大林さんが歩み寄ってきた。

「とりあえず、ご飯食べたらたつぷり仕事しな! それから、遅刻一回目は許されるけど二回

目は有り得ないから!」

そう言つて、大林さんは去っていく。ホッと胸をなでおろし、ロケバスへと潜り込む。

「どうやら、何とかなりそうだ。」

ロケバスの中ではドライバーのキムさんが一人で、弁当をバクついていた。年は四十半ばのキムさんだが、ロン毛にジージャンというスタイルで、口数は少なく一昔前のロッカーのようだ。

隅の座席に腰掛け、トンカツ弁当を頬張る。

(試験前の学生でもないのに、嫌な気分だなあ……)

そう思いながら、久しぶりにマズイ弁当を黙々と口に運んでいく。すると、いつの間にか長身の人影が近づいていた。堀さんだ。

「何食うとるねん!」

勢いよく飛び込んできた堀さんの拳が、ボクの頬を捉えた。それと同時に手に持っていた弁当をひっくり返してしまう。

「すみませんでした!!!」

深々と頭を下げるも、堀さんは続ける。

「遅刻したんやから、自分でバツ作つて肝に銘じな。誰が食うていい言うたかしらんが、俺は認めんで!!!」

「すみません……」

謝罪以外の言葉が他に見当たらなかった。

その時である。

「オイ！ 堀！ オマエ言い過ぎやで。彼、AD初めてなんだろ？ 飯くらいゆっくり食わせてあげろや」

キムさんの罵声がロケバス内に響き渡った。その後キムさんと、堀さんは二言三言会話し、やがて堀さんは納得のいかない表情でロケバスを後にした。

座席に散らばったキャベツやトンカツの油カスを拾い集める。ごはん粒にいたっては、ズボンのあちこちに付着してしまっている。最後の一切れのトンカツを口に入れようか捨てようか迷っていると、涙が溢れてきた。シンと静まり返った車の中、ボクの嗚咽は赤子のようにワンワン繰り返された。自分は、ヘタレでも何でもいいや、そんな風に思っていた。

「もう、辞めようかな……」

これまで勤めた二ヶ月の中、チラリと浮かんでは消えていったその言葉を遂に口に出してしまった。その時、目の前のロン毛がゆっくりと振り返るのが見えた。

「高ちゃん、あのなあ……俺、実は昔、香港映画のプロデューサーだったんだぜ」

キムさんが思いもよらない言葉を発した。

「だけどな、色々あつて結局、今は、しがないバスの運ちゃんさ」

キムさんの声をこんなにハッキリ聞くのは初めてだった。

思った以上に、高音の美声である。

「まあ、色々あるけど。やっぱり努力しなかったことが原因かな。ま、子供もできたし、こっちの方が安定してるんだけどね」

キムさんは続ける。

「高ちゃんもさ、ディレクターになりたいんでしょ？ こんな俺だって、映画作ってたんだから、我武者羅にやればいつか、絶対できるって」

サイドミラー越しに見えるキムさんの瞳がこちらをのぞく。ミラー越しに眼が合い、涙と鼻水だらけのボクはとてつもなく恥ずかしくなってしまった。

「ハイ！ がんばります」

油カスだらけの唇でそう言うのが精一杯だった。

アイツとの再会

だがしかし、人間とははかなき怠惰な生き物である。その後、ボクはカプセルホテルで寝過ごしましたしても遅刻してしまう。フロントからのモーニングコールは一回のみで、ボクは「起

きます」と言いつつ二度寝した模様だ。

チーフの大林さんにつかまり「次ないから。もう一回遅刻なら現場禁止だよ」と念を押される。現場禁止というのは、撮影現場に一切の出入りを禁止されることである。仕事は電話取りなどのデスクワークのみで、格段に楽になるが現場命のADにとってはこの上ない屈辱である。(もう、後がないな……)

そう思うとプレッシャーに押しつぶされそうな気もするが、その時のボクは意外なほど楽観的でゲーム感覚で仕事を楽しむようになっていた。ドライでは誰よりも早く監督の指示に対応し、スタンド・インでは他のADに絶対負けない速さを意識し、正確なバミリを心がける。先輩ADが「ADの仕事なんか、三日もあれば覚えられるよ」と言っていたが、事実その通りでやる仕事は極めて単純である。一言で言うと、それは「気遣い」。普段飲み会では、大皿のサラダがきても誰によそうでもなく、バクバク食べているような典型的B型人間にとつて、ADとはもつとも向いていない仕事なかもしれない。だがたまに監督に「いい動きしてるね」と褒められるのが嬉しく、ボクは「一日で何回褒められるかゲーム」を一人開催。張り詰めた緊張感やスリルも一人ゲームのように楽しんでた。

二度と遅刻をしないように、スタジオ内の長椅子で眠り、休日には誰よりも早く来てスタッフルームを掃除する。可愛い女優の卵のエキストラが来た日にはいつも以上に声を張り上げ仕事をし、「俺にほれんなよ」バリのオーラで立ち振る舞う。悪くない日々だった。

ある日のスタジオ撮影。ボクはいつも以上に張り切って仕事をしていた。スタジオ撮影は、ロケに比べてどこに何があるか把握してやりやすいせいもある。だが本当の理由は、視線の先に、見学に来ていた女子アナの姿があったからだ。サラリーマンのころ、いつもねぼけ眼で見っていたニュース番組のキャスターである。高揚感も尋常ではない。

「時計合わせます！」

ドライが終わると、ボクは脚立に乗っかりセット内の時計をドラマ時間に合わせ始めた。こうしないと、シーンが飛んでもつじつまが合わなくなってしまうのだ。眼下にチョコリと立つ女子アナに見とれていると、その横に、もう一人いつの間にか若い男が立っていた。彼は女子アナと何事か話し込んでおり、時には業界人らしい大げさな身振り手振りを交えたりしている。きつと、局のスタッフか何かだろう。ジーンズにトレーナーという飾り気のない服装をしている。そう思い、もう一度彼の眼差しを見たときだ。どこかで、確かに見覚えのある顔。ギョロとした大きなたれ目。ハリセンボンのようにワックスでツンと立った髪……

(笹野!!)

視線の先に突っ立つヤツは、紛れも無く高校の同級生の笹野だった。



笹野とは同じクラスだったが、ほとんど会話をしない仲だった。勉強一色のボクに対し、どちらかというとは彼は万能タイプの男だった。ボクと彼は共に東大文Ⅲを第一志望にしていた。結局ボクは戦わずして推薦で慶応に入ったのだが、彼は一浪して東大に入ったと聞いている。しかし、その後どうなったかは知らない。

彼と高校時代に話した内容で唯一覚えているものがある。

「映画監督になりてえなあ」

ボクがそんな風に周りのメンツに言うと、大半の連中が「無理だろ」「どうやってなんだよ」と否定的な意見を漏らしていた。すると、突如現れた笹野がこう言った。

「ボクも、その道を考えている」

忘れもしない、高三の出来事だ。



いったいどうして、この場に笹野がいるのか。当惑しながら脚立を降り、スタンド・インをするために、セット内の社長椅子に座る。撮影部のカメラがボクをとらえ、セット横に設置さ

れたモニタに間抜けな顔が映し出された。通常なら、椅子に座ると五秒で眠くなってしまおうのだが、この時ばかりは違った。全身をなんとなく気まづい空気が駆け巡る。

テレビ通りに柔和な笑顔を見せる女子アナに対し、笹野は間抜けな顔の映ったモニタをじつと眺めている。気づかれてしまったのだろうか。いやいや、そんなことはないだろう。ほとんど接点の無い仲なのだ。仮に気づかれてしまったら、「おう！ 頑張ってるな」と、冷やかな言葉でもかけてくるのだろうか。そんな状況が頭に浮かび、ボクは当然のごとく俯き加減になっ

ていた。

「高崎！ 下向いてたら、明かりわかんねえじゃねえか！」

撮影部の罵声が飛んだ、その時だった。ぼんやりとモニタを眺めていた笹野の肩がピクツと大げさに震えるのが見えた。彼は、視線の先をそのままボクのほうへと向けた。仕方がないので無の表情で正面を眺めていると、笹野のギョロつとした瞳が目の奥で見えた。彼は、先ほどの軽快さとは打って変わり、静かな視線をこちらに送っている。おちゃらけて笑ってくれればいいものの、何となく強張っているようにさえ思う。

「本番始まります！」

大林さんの掛け声が耳元ではじけた。ホッと救われたような気持ちになり、シンと静まり返ったスタジオ内でゆつくりと笹野のいた方を見やると、去り際の彼の背中が見えた。接し方に困っていたのはボクだけではなかったらしい。



「有野ちゃん？ さっきいた人誰だい？」

撮影が終わり、ボロ雑中の有野に問いかける。

「ああ、局員だよ。若いんだけど、演出部のホープで有望視されてるらしいよ」

有野ののんびりとした声が、耳の奥に鋭く刺さった。

あれから六年。やはり、笹野はテレビ局の人間になっていたようだ。

(クソ!! いつの間にかこんなに差がついているんだ……)

当時のボクの月収は十五万。彼はその三倍は優に超えているだろう。毎月、帰りもしない家の家賃や光熱費の支払いで、貯金を削りながら生活しているボクにとって、彼の存在はとてつもなくまぶしく見えた。いや、ハッキリ言って視界から消えて欲しいとすら思っていた。ボクは、その日以来、ゲーム感覚で仕事を楽しめなくなってしまった。

全てのものに、別れを告げて

「本番！ 五秒前！ 四、三、二……」

□元から、そう漏れるや、両サイドから怪訝な視線を感じた。

「次は、大森……大森です」

車掌のアナウンスがこだまする。どうやら、帰り際の電車で眠っていたらしい。夢の中のボクは既にチーフADか。

その日は土曜日の夜。週に一度の帰宅日だ。彼女が家で手料理を作って待っているはずだ。勢い勇んで自宅へ向かうと、目の前に缶ビールを飲む彼女がいた。テーブルの上には、いつもの手料理ではなく、スープの惣菜が並べられてある。

「あれ？ 先に飲んじゃったの？ まーいいけど」

そう言いながらも、ボクらはビールの栓を開けて乾杯する。

「おかえり」

ボソツと漏らす彼女の唇に、酒臭い自分の口を合わせる。そのまま、エアベッドの上に彼女を押し倒し、一週間ぶりの長いキスをする。乳房に手を重ね、ジーンズのベルトに手をかけたときだ。

「あのさ、話があるんだ」

そう言って彼女はボクの手をはねのけ、立ち上がると財布の中から合鍵を取り出し差し出した。「別れよ」

なんとなく倦怠期ではあったが、ボクと彼女の関係はもう一年以上も続いている。合鍵も用意し、そろそろ同棲でもと思っていた頃だ。

「自分の胸に聞いてみなよ。アタシ、セックス要員じゃないしさ」

彼女は、そう言いながら合鍵を突き出し続ける。

半ばあつけにとられながら受け取ると、ドアノブに手をかけ彼女はこう言った。

「好きな人ができたの。じゃーね」

意外なほどあつけない別れだった。

吹っ切れた女性に何を言っても、もう戻らない。



二時間後、ボクは大学時代の友人を招集していた。

「女なんてナンボのもんよー」

彼女いない暦二十四年のトオルが言う。

「星の数ほどいるわけだしさ」

彼女いない暦は五年だが、いまだ真性チェリーのヒロヤが言う。

ボクらは彼女が残っていた惣菜に箸をつけながら、ビールと日本酒で乾杯した。不思議なことに、それほど落ち込んではいなかった。それよりもこうして久しぶりに男友達と酒を飲むのが想像以上に愉快だった。ビデオデッキに、自分の制作するドラマのテープを挿入する。ゆっくり見るのが初めてだ。

「あのシーンは、横浜のどこかで、あの俳優はいい人そうに見えるけど実は……」

そんな裏話を得意げに披露した。周りにとってはこの上なくウザイであろうが、自分が制作に携わったドラマを見るといっけいのは他に類をみないほど、不思議で楽しいものだ。それが、ADの醍醐味と言ってもいいほどに。



「朝です！ 朝です！ 起きましょう！」

誕生日におかあちゃんが買ってくれたドラえもん目覚まし時計が唸る。タケコプター型の

スイッチを押すと「ちゃんと起きたね。チャンちゃん♪」とドラが褒めてくれる。ちゃんと起きていないボクは、日曜日くらいいいだろうと、また再び眠りに付く。

日曜日はロケハンの日である。ロケハンに行くのは先述したようにディレクターやチーフADのみである。ボくら下っ端は原則的には、ロケハンに向かうスタッフを見送るというルールになっていたのだが、真面目に見送りに行っていたのは、ボクや河野さんぐらいなもので、アナアなルールになっていた。正午までにスタジオに行けば、どうにかなるだろう。そんな風に高をくくっていたのだ。

やがて二日酔いのままドラムバッグ片手に、電車に乗る。日曜日の朝らしく家族連れやカップルで賑わう電車。ADを始めた当初は普通な彼らをうらやましくばかり思っていたが、もう、どうでもよくなり始めていた。

人混みのセンター街を掻き分け、スタジオへ。スタッフ・ルームへ入ると、やはり河野さんしかない。まあ、何とかなる……ハズだった。

「あーあ。知らないよ。大林さんカンカンだったよ」

河野さんがご愁傷様といった顔つきでこちらを見てくる。

(甘かった……)

なんとかせねばと思いつき、雑巾片手に四つん這いになって、床掃除を始めた。ヤニで黒ずんだ床はさつと拭いただけでも真っ黒に雑巾を染める。

(終わつたな……現場禁止か)

そう思いながら、1%の可能性にかけて床を磨く。出社したAPさんが「どうしたの？ そんなに」と怪訝そうに声をかけてきたが、「バツですから……」と言うのが精一杯だった。ひとしきり掃除を終えたところで、大林さんと堀さんが帰ってきた。

「ちよつと……」

大林さんに呼び出されたボクは、その場で宣告される。

「オマエには失望した。ホントはクビだけど、制作会社の社長さんの顔もあるし、無期限の現場禁止ね。ま、最終回のスタッフロールには一応名前載るんじゃない」

(無期限か……)

一週間や一ヶ月の現場禁止かと思っていたが、甘かった。堀さんには翌日からの大量のデスクワークを押し付けられる。みなが現場に行っている間に黙々とこなさなければならぬ代物だ。その日の晩、スタジオの一番隅っこの長いすで寝た。青白い満月の光が、細く長い廊下に映えている。明日からは、好きな時間に起きていいんだな。そう思うと、嬉しいようなせつなような不思議な気分が陥った。



シーンとした廊下。物音一つしない嘘のように静かな空間で、ボクは眼を覚ました。スタツフルームの方に足を運ぶと予想通り誰もいない。つけっ放しのテレビから「笑っていいとも」がむなしく流れている。デスクに座り、早速昨日堀さんに出された宿題に取り掛かる。劇中に登場する酒のラベルのデザイン、雑誌のデザイン、テレビ局の名前に、明日の割本の準備、それと……

(ハァー)

深いため息をついた。時折かかってくる電話に「現在全員ロケ中です」と同じ台詞ばかりを繰り返していた。ボクの存在は一体なんなのだろう。アルバムの集合写真で一人だけ欠席して右上に掲載されるほど目立つわけでもなく、縁の下の力持ち的な存在でもない。現場を失ったADは、飛べない野鳥みたいだ。張り詰めていた緊張感の糸がプツリと切れ、頭の中が真っ白になった。気が付くと、ボクは目の前の書類を投げ散らかしていた。

「一旦CMはいりませう」

ケラケラと高らかに笑うタモさんとその仲間たちが羨ましかった。落ち着かず、廊下に出てタバコを吹かす。どこまでも続く細長い廊下。ここで、未来のスターを夢見てオーディションに来る親子たちを何度も目にしてきた。だっ広い窓からは、渋谷とそれに続く街並みが見渡せる。なんとなく、曖昧にはあったが、遠くに行ってみたいな、そんな風に思ってた。

やがて、無気力のまま実家へと電話をする。出たのは母親だった。

「ケン。元気かい？」

母親はいつものように明るい声で語りかけてきた。

「俺……AD辞めるわ」

少しの間、母親は口を開いた。

「あんたが決めるのなら仕方ないね。好きにしなさい」

明るくも暗くもない声だった。

「頑張ったけど……もう限界だ」

「そっか。一回札幌帰ってゆっくりしたら？」

暖かい言葉に鼻の奥の方で何かがこみ上げてくるのを感じる。

「それは……できないけど、しばらくリゾートバイトでもしながら、シナリオ書いて応募するわ」

シナリオコンクールには何度か応募したことがあった。全て一次予選落ちだったが、勉強し直してみるのも有りかもしれない。そんな風に漠然とだと思っていた。ボンヤリと窓を見やると、だっ広い空を舞っていた白雲がポワリと消えた。

「お世話になりました」

小さなメモ書きを残し、ボクはドラムバッグ片手にその場を離れた。もう、二度とこの場に

来ることはないだろう。

白光が眩しい。スタジオを去ったボクは、刑務所を出た囚人のような感覚に陥っていた。

(懲役三ヶ月。酒気帯び運転ってとこかな)

センター街を歩いていると、無性に腹が減った。マックでビッグ・マウスのセットを買う。ポテトにサラダもつけた。もう、自分ひとりのためだけに買えばいいんだ。椅子代わりのドラムバッグに腰をかけ、道行く人々を眺める。買出しに行っていたときは、実にスローモーだと思っていた人々の足取りが、意外に早足であったことに気づかされる。突如、目の前のオーロラビジョンからけたたましい爆音が流れ始めた。パンクバンドGOBのプロモーションビデオである。随分の間、音楽を聴いていなかったが、やっぱり洋楽はいい。ギターに合わせてカメラアングルが目まぐるしく回転する。ドラムのリズムに合わせて、次々にエフェクトのかかった鮮やかな映像が展開する。

(ミュージック・ビデオか……それもいいな)

田舎のホテルにでも引きこもろうと思っていた、ボクの前に一筋の光明が見えた。

立ち読みサンプル
はここまで

第三章 目指せ！東大！ハーバード！ 伝説のガリベン少年